

巻頭言 「バル夫妻、あるいは純粋な友情」

宇野 元

ヘルマン・ヘッセは牧師の家に生まれ、牧師を志して歩み始めるものの、最初の段階で躓きます。絶望する息子をみかねた家族は、知り合いの専門家の下に送りました。けれども、願わしい結果は得られませんでした。少年ヘッセをあずかった人は、クリストフ・ブルームハルトでした。霊的指導者として知られるブルームハルトも打つ手がなかったようです。作家として成功してからも、ヘッセの人生は順調ではありませんでした。私生活の問題と、第一次世界大戦によって、彼の心は押しつぶされそうになります。そんな危機の時期に、大きな意味をもつ出会いがありました。

バル夫妻。夫フーゴ・バルは、20世紀の特色ある芸術運動、「ダダ」の創始者の一人です。しかし華々しい活動ののち、ダダと決別し、おなじくこの運動を代表していた女性と結婚して、スイス南部の田舎に暮らしていました。そこに、近くに住んでいたヘッセが、趣味と療養を兼ねてしていた水彩画の道具を携えて訪れたのです。三人の書簡が残されていて、打算のない純粋な友情が証しされています。バル夫妻も時代の波にもまれながら、キリスト教に確かな拠り所を見いだしていました。信仰的な家庭に育ちながら、懐疑的なヘッセに、彼らは素朴な信仰の言葉を贈ります。そのメッセージは、他の助言や励まし以上に、ヘッセの心にしみ込んだと思います。

お元気でいらっしゃいますか？ イースターの日、あなたのことを想っています。キリストは復活されました。

キリスト教会は、心の配慮が存在する交わりです（私たちがそれを作り出すものではありません）。ヘッセは、バル夫妻との交わりに導かれることで、この交わりに参加していたとみることができるでしょう。そしてその中で、『荒野の狼』の作者は、心の均衡を取りもどすことができた。現代の荒野にある心への最良の配慮はなんであるか、考えさせられます。多くの癒しの手段が提供されているにもかかわらず、癒えない心があります。私たちに委託されていることは、おなじ時代にあり体験を共にする仲間として、自分の拠り所を伝えることです。単純に。純粋な友情の心をもって。このことは教会の「なか」でも期待されているでしょう。完全なクリスチャンはいないので。私たち誰もがヘッセになりうる者であり、また幸いなことに、バル夫妻の役割を果たす者ともならせていただけるのです。